

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 17 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02246

研究課題名(和文) 白樺派からプロレタリア文学への文学的思想的展開の実証的研究

研究課題名(英文) Empirical study of literary ideological development from Shirakaba to proletarian literature

研究代表者

尾西 康充 (ONISHI, YASUMITSU)

三重大学・人文学部・教授

研究者番号：70274032

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：白樺派の有島武郎からプロレタリア文学の小林多喜二への流れは、大正から昭和へという時代区分の転換のみならず、白樺派からプロレタリア文学へ、無政府主義から社会主義へと、日本文学史上の諸傾向の重要な転換を示している。この意味において、両作家の作品は、1900年から1930年代にかけての文学・思想を解き明かすための貴重な手がかりである。

大正と昭和という違う時代の制約から有島武郎は無政府主義に親近感を抱いたが、思想と実践との一体化を重んじたプロレタリア文学の先駆者として、有島の文学は多喜二の作品とともに高く評価される。本研究は両作家の流れと発展とを、文学史上、思想史上の観点から意味づけた。

研究成果の概要(英文)：The flow from Shirakaba's Arishima Takeo to Proletarian literature Kobayashi Takiji is not only transformation of the time classification from Taisho to Showa, but also from Shirakaba to Proletarian literature, from anarchism to socialism, various in the history of Japanese literature. It shows an important transformation of the trend. In this sense, the work of both writers is a valuable clue to unravel literature and thought from 1900 to 1930's. Takeo Arishima had a sense of close affinity to anarchism from constraints of the different times of Taisho and Showa, but as a pioneer of proletarian literature, which emphasized the integration of thought and practice, Arishima's literature highly appreciated along with Takiji's work. This research meant the flow and development of both writers from the perspective of ideological history in the history of literature.

研究分野：日本近代文学

キーワード：白樺派 プロレタリア文学

1. 研究開始当初の背景

この数年来の「プロレタリア芸術運動」への関心と着目は、20世紀末からの、国際的な格差社会拡大への批判や危機感に発している。それは誰の目にも明らかとなり、2008年に至って、ワーキング・プアや「名ばかり管理職」などの現状告発とともに、「蟹工船」ブームを巻き起こし、一躍、小林多喜二を時の人とした。また小林多喜二のみならず、初期社会主義小説と目される作品を創作した白樺派同人の有島武郎もまた日本文学史上、重要な作家であるとの認識が共有された。上記のような社会状況のなかで、広義の「プロレタリア芸術運動」への関心が醸成され、新たな現代的なアプローチが試みられ、その焦点は小林多喜二に結ばれていった。小林多喜二の文学・思想・生き方にそれに応える豊かな内実があったからであるが、その再発酵を意識的に働きかけたのが白樺文学館多喜二ライブラリーの活動であった。多岐にわたる諸活動のうち、過去4回の小林多喜二シンポジウム(東京〔2003、04〕、中国・保定〔2005〕、オックスフォード〔2008〕)は、小林多喜二研究の水準を大きく引き上げる特筆すべきものとなった。とくにオックスフォード・シンポジウムは、「多喜二を単一の出発点としながら、池に広がる波のように、時空を貫いて多様な領域に広がる、小林多喜二研究のもたらす大きな衝撃力」(ヘザー・ボーウェン＝ストライクの総括)を示すことになった。狭義の文学研究にとどまらず、人文・社会科学全般にわたり、しかもいずれもが現代の抱える諸問題と切り結んだ問題意識を共有している。さらに2012年2月には、小林多喜二ゆかりの小樽商科大学で、5回目の国際シンポジウムが開催された。

他方、研究者が中心となった有島武郎研究会では、年2回の全国大会を開いて、有島武郎の文学を多角的方面から分析検討し、研究成果をあげ続けている。すでに私は有島武郎研究会での口頭発表にもとづいて、査読付の年刊の研究誌に「有島武郎における 開拓地/植民地 文学 「迷路」から「カインの末裔」へ」(2008)、「有島武郎と移民労働者 アメリカ留学体験をめぐって」(2010)を発表し、アメリカ留学体験を総括して、有島が初期社会主義小説を創作するようになった原体験について考察した論文を発表し、学会内外にむかって問題提起をおこなっている。

白樺派の有島武郎からプロレタリア文学の小林多喜二への流れは、大正から昭和へという時代区分の転換のみならず、白樺派からプロレタリア文学へ、無政府主義から社会主義へと、日本文学史上の諸傾向の重要な転換を示している。この意味において、両作家の作品は、1900年から1930年代にかけての文学・思想を解き明かすための貴重な手がかりである。

しかし現在のところ、有島武郎の文学を形成する土台となったアメリカ留学の現地調

査は十分とはいえず、小林多喜二の文学の創作のヒントが記された自筆草稿ノートは、翻刻されずに遺されている。近現代日本文学史にとって貴重な2人の作家の文学的・思想的核心を明らかにするために、本研究では、有島武郎に関するアメリカの現地調査と、小林多喜二に関する自筆草稿ノートの翻刻と分析をおこなう。

2. 研究の目的

有島武郎から小林多喜二への流れは、白樺派からプロレタリア文学へ、無政府主義から社会主義へと、日本文学史上、日本思想史上での諸傾向の転換を示し、その時代を象徴したものであった。小林多喜二が白樺派の人道主義、とりわけ志賀直哉のリアリズムの手法に学んだことはよく知られている。その前段として、庁立小樽商業学校に在学していた頃は『小さき者へ』や『生まれ出づる悩み』など、有島武郎の小説を読みふけり、卒業を前に創刊した回覧雑誌には「生まれ出づる子ら」というタイトルを付けるほどであった。『生まれ出づる悩み』(1918年)の主人公木本は、貧しさのために東京での学業をあきらめて北海道岩内の実家に帰る。漁夫として「荒くれた自然の威力」と格闘する一方、芸術への情熱を抱いた青年画家として「宏大で儼かな景色」を描き続ける。有島自身がモデルとなった作家の「私」は、10年ぶりに木本に再会し、筋骨たくましい漁夫の姿への変貌ぶりを見て、木本が「パンの為に生活のどん底まで沈み切つた十年の月日」に耐えてきたことを思い浮かべる。画家としての才能にも恵まれていた小林多喜二は、労働と芸術の間で葛藤する青年木本の生き方に深い共感を覚えたにちがいない。大正と昭和という違う時代の制約から有島武郎は無政府主義に親近感を抱いたが、思想と実践との一体化を重んじたプロレタリア文学の先駆者として、有島の文学は多喜二の作品とともに高く評価される。本研究は両作家の流れと発展とを、文学史上、思想史上の観点から意味づけるものである。

3. 研究の方法

有島武郎が滞在したアメリカの諸都市、具体的にはフィラデルフィア、ボストン、ワシントンに出張し、滞在当時の資料を収集する。在籍した学校の学籍簿や宿泊したホテルの宿泊台帳、アルバイト先の勤務記録などといった滞在記録に加えて、当時の新聞雑誌の記事を広く集め、有島武郎がアメリカ社会のどのような社会環境の下で生活し、アメリカの民衆とどのような接点を持っていたのかを明らかにする。これら収集した資料を日本語に翻訳して、報告集を作成するとともに、インターネット上で一般公開する。

他方、小林多喜二の自筆草稿ノート(全13冊、約1700頁)を翻刻する。多喜二の創作過程を明らかにするとともに、作品の背景に

あった国内外からの文学的思想的な影響を明らかにする。

4. 研究成果

有島武郎が滞在したアメリカの諸都市、具体的にはフィラデルフィア、ボストン、ワシントンに出張し、滞在当時の資料を収集した。彼が在籍した学校の学籍簿や宿泊したホテルの宿泊台帳、アルバイト先の勤務記録などといった滞在記録に加えて、当時の新聞雑誌の記事を広く集め、有島武郎がアメリカ社会のどのような社会環境の下で生活し、アメリカの民衆とどのような接点を持っていたのかを明らかにした。これら収集した資料の一部を日本語に翻訳した。

小林多喜二の作品は、彼と同時代において、小林多喜二の代表作が中国語・ロシア語・英語などに翻訳され、その優れた文学性と合せて「反戦・平和・国際主義」の観点が高く評価されていた。近年の小林多喜二浮上の社会的要因が国際的・社会構造的なものであることから、必然的に欧米・アジアの日本研究者も注目し、作品が持つ独自のテーマも論じられはじめています。さらに中国・韓国・台湾・アメリカ・フランス・スペインなどにおいても新たな翻訳書が刊行されつつある。こうした国際的な受容と評価・翻訳のあり方などについて、現段階で各国のプロレタリア文化運動などとも関連させながら、単に小林多喜二が何を考えていたのか、という作家の問題に限定するのではなく、作品に込められたメッセージがどのように読まれたのか、という作品の受容を広く検討することが大切になっている。自筆草稿ノートを翻刻することによって、彼が遺した作品に込められていたさまざまなテーマを明らかにし、現在定説になっているものよりも、一層多様で、ユニークな解釈の可能性をひらくことができた。

その際に、あらためて小林多喜二の同時代における文学や悲劇的な死に対する受け止め方、現在に至る受容のされ方について、精緻に調査・検討することも必要で、本研究を通じて、多岐にわたる小林多喜二文学の諸相を明らかにすることができた。

もう一つの意義は、有島武郎がアメリカ留学体験を通じて、アメリカでの資本主義の実態を目の当たりにし、帰国すれば自分は有産階級に属する人間であっても、アメリカにおいては黄色人種の一人で、貧しいポーランド系移民労働者とともに働くしかないという現実を知ったことが、彼の文学形成にどのような影響を与えたかを明らかにすることによって、彼自身の文学的思想的転換を遂げたプロセスをより明確にできることである。有島武郎はアメリカの資本主義に対する違和感からクロボトキンの無政府主義へと傾倒していったのであるが、同時に移民に開かれた社会であることにも可能性を見いだし、人種民族差別を克服する道を模索していた。小林多喜二たちの昭和プロレタリア文学の

先蹤となった大正白樺派の初期社会主義を体現した有島武郎の文学は、このようなアメリカ留学体験にもとづいており、それを解明することは有島武郎の文学の核心に迫ることになる。

他方、小林多喜二の自筆草稿ノートの一部を翻刻した。多喜二の創作過程を明らかにするとともに、作品の背景にあった国内外からの文学的思想的な影響を明らかにした。イブセンやストリンドベルクなど、明治大正期の日本社会で翻訳本が普及しつつあった北欧系作家の文学作品を読み、多喜二が自己の「全体的改革」を成し遂げようとした経緯を検証した。多喜二の自筆草稿ノートには、それらの作品からどのような影響を受けたのかが分かる手がかりが記されていた。そしてさらに、自筆草稿ノートには、いくつかの走り書きのメモが記されていたが、それらをたどることで、マルクス主義思想へ傾倒する方向へと大きく発展した多喜二の作家的軌跡を明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

尾西康充

民主主義文学批評とは何か なぜ批評は生まれたのか、民主文学、査読有、第632号、2018、pp.1-9

尾西康充

政治小説の可能性、民主文学、査読有、第627号、2017、pp.104-109

尾西康充

集団が生み出す暴力:「人を殺す犬」「一九二八年三月十五日」、小林多喜二 生地からの発信 秋田県多喜二祭の記録、査読無、第3号、2016、pp.28-31

〔学会発表〕(計1件)

尾西康充、Wahrheit oder post Wahrheit Das Denken der japanischen Kultur、ハイデルベルク大学日本研究所公開講演会、2017年6月19日、ハイデルベルク(ドイツ)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

尾西 康充 (ONISHI, Yasumitsu)
三重大学・人文学部・教授
研究者番号：70274032

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()